

土木学会選奨土木遺産 機能と装飾にこだわった 猿 猴 橋



広島市南区

むかし、えんこう川のほとりに・・・まえから、この川にはえんこうが住んでいて、腹をすかすと、人間のきもを食べるといわれていました。

これは『広島のみかし話』に収録されている「えんこう」という話です。毛利輝元による築城、福島正則による西国街道の城下への引き入れにより、広島が城下町の体を成していくと、城下の町や川、橋に名前が必要となります。城下から一番東の猿猴川は、人を引き込むという想像上の怪物「猿猴」が棲みついているとされ、その名前が使われたということでしょうか。

明治時代になると猿猴橋も国道となり、19年に架け替えがされます。ただ、太田川は4～5年おきに洪水があったようで、詳細な史料はないものの猿猴橋も幾度かは流失もあったでしょうし、洪水の度に修繕していたと考えられます。

大正14年（1925）、老朽化が進んだ猿猴橋は木橋から鉄筋コンクリート連続T型桁橋（橋長62.4m、幅員8.5m）に架け替えとなり、大正15年3月完成しました。橋脚はケーソン基礎、表面に石張りをあしらっています。さらに、妻木伊三郎の私財によって花崗岩造りの高欄には2匹の猿が桃を持ちあう透彫り風のパネルがはめ込まれ、親柱の上にはブロンズ製の大鷲、そして束柱上にシャンデリア風の電飾灯という絢爛豪華な猿猴橋に仕上がりました。

しかし、美しかった橋も戦時中の金属回収令によって、装飾品は全て取り外されました。被爆しながらも橋の原形をとどめた猿猴橋でしたが、その後の路線変更や駅前大橋の完成などにより、「東の玄関口」としての役割を終えます。

交通量が減少し、忘れられかけた猿猴橋でしたが、広島市による「被爆70周年記念事業」の一環として平成28年（2016）3月に美しい橋に復元されました。平成23年度「被爆に耐えた装飾的橋梁」として土木学会選奨土木遺産に認定された猿猴橋は、すでにその価値を認められており、広島駅周辺の再開発事業とともに地域の賑わいを創出することと思われます。

■位置図



高欄には2匹の猿が桃を持ち合う透かし彫り風のパネル



親柱に復元されたブロンズ製の大鷲



復元された猿猴橋（平成28年）
3径間連続+2径間連続鉄筋コンクリートT桁橋 橋長62.5m
大正15年3月16日（供用開始）完成



完成当時、金属製の装飾があるのは、日本橋（明治44年）と猿猴橋の2橋だけであった